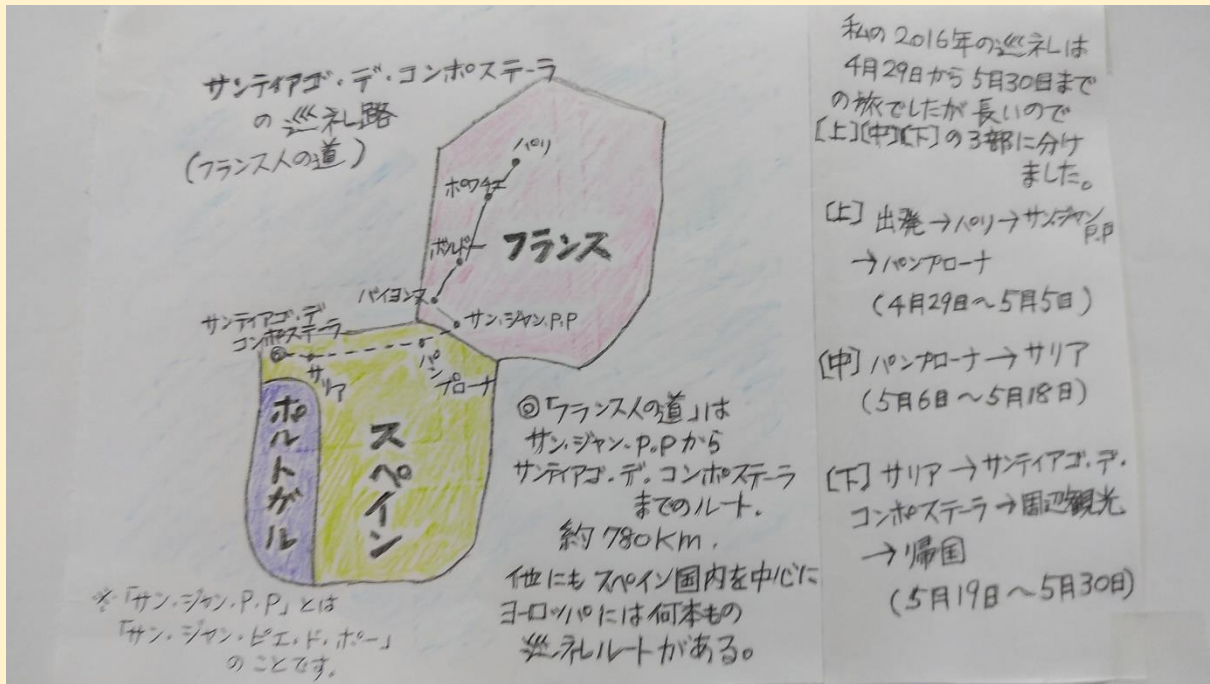


第1回サンティアゴ巡礼【上】

(2016年4月29日～5月5日)

(この導入部分は私の愚痴っぽい繰り返り言のようで退屈ではありまじょうが、なぜこの旅を思い立ったのかという説明として必要だったので書きました。つまらなかつたら飛ばして下さい。)



私がスペイン北西部の「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」のことを何かの本で知ったのは十年ほど前のことだった。そして「ああ、行きたいなあ。」と思った。でもとても無理だよなあ、とも思った。お金がかかるからではない。お金のことはその気になれば何とでもなる。問題は「しがらみ」というやつである。その時のうちの家族構成は私と単身赴任中で週末だけ家に帰ってくる夫とまだ十代の子供たち二人、それと夫の両親であった。もし夫が自宅に住んでいるならこういう家族構成であっても稀には妻が仕事で出張したり海外旅行をしたり留学をしたりというケースもないではないだろう。あくまでも稀に、であるが。しかしうちの家族にとってはそのようなことは思いも及ばぬことに思えた。皆どうやら私がいつも家にいて世話をしてくれるのでなければ生きていけないと思っているようだった。主婦が家を空けるのは日常の買い物や公共機関などへの用事、年に一、二度友人とのランチなど、二年に一度程度の同窓会など、あるいは実家や親戚関係の用事などに限ってOKであり、もし主婦が家族と一緒にない旅行をしたら数年に一度、二泊三日ぐらいが限度であろうという感じだった。

でもそれっておかしいじゃないか？夫も子供たちもそしてたとえ老父母だって本人の身体的経済的時局的条件さえ整えばいつでもどこにどれだけの間出かけたって何の問題もないのに、主婦である私だけが基本的にいつも家にいなくちゃいけないって？女は家族の世話をするためだけにこの世に生まれてきたというのか？それ以外のことのできるのには特別に恵まれたケース、または家族からの特別の恩恵として賜うことができればに限るとい

うことか？・・・このごろ私はしばしばそのように考えて心がとんがっているのだが、当時はまだそこまでは考えていなかった。現実では思春期の子供たちの相手でなかなか大変だったのである。

ところがある時転機が訪れた。2011年11月、ブータン国王ご夫妻が来日され、テレビで連日ブータンに関する報道がなされた。それで私はそれまでよく知らなかったブータンという国に大いに魅せられ「何が何でも行く！」と思い立った。「今年中は無理だが来年絶対に行く！家事をする人がいないと困るというなら家政婦さんを頼んででも行く！」

そのころ子供たちは大学四年と高校三年で、夫の単身赴任も一年前に終了していた。老人が二人いるが義姉も時々来てくれるし世間一般的に考えても母親が一週間程度旅行をすることは特に非難されるべき状況だとは思われなかった。それで私は夫その他を説得し、2012年8月とうとうブータンへの八日間の一人旅を決行した。そしてそれ以来海外一人旅というものに病みつきになった。



私は実は小さいころから歩いて、あるいは列車に長く乗って旅をすることに憧れていた。なぜならそのことが絶対自分自身を達成感で満足させてくれるはずだという気がしていたからだ。私は小さいころから自分だってひとかどの者になりたいんだ、と思っていた。しかし私には人より秀でている部分は何もなさそうだった。特に親から私は褒められたことがなかった。よその人はわたしのことを頭がいいとかおとなしいとかしっかりしているとか時々言ってくれるが、母親は私が何を頑張っても当たり前と思っているらしく、子供は褒めると凶に乗って努力しなくなる、ダメ出しをするのが親の務めと考えていてもっばら出来ないことだけを数え上げられた。その上私の母親が理想とする娘像というのは何でも素直に親の言うことを聞き、嫌なことがあっても泣かず怒らず、学校の成績は優秀で親の鼻を高くし、出来るだけ金と地位と名誉のある男性に縁付いてさらに親を得意にさせることができる娘であった。そんなこと出来るわけがないじゃないか！一方父親は優しい穏やかな人だったので母親のように叱咤激励の鞭をふるうことはなかったが、やればできるはず、とまっているところや娘の理想像を才媛で末はいいところに嫁に行つて良妻賢母に、というところに据えている点では同じであった。

また学校では私は国語や算数は少々出来たので「勉強のできる子」と言われていたが、他の教科にはムラがあったし体育についてはまるでダメだった。実は子供の世界では勉強が出来る子よりもスポーツが出来る子のほうがカッコいいのである。従って見た目も良くなき気が利かず、ノロマでドンくさい私は真にカッコ悪い存在であった。それで子供時代の私は家も学校もあまり楽しくなかった。私が図書室などの本を沢山読んでいたのは現実の楽しくない世界から抜け出す方法を模索していたのだな、と今になって気づく次第である。

家も学校も楽しくはなかったが絶望はしない性格だったらしい。自分のことを冴えない人間だと思っはいたがそういう私にもプライドはあった。私だって何とか人から一目置かれる存在になりたかった。そして自分が人よりもよくできることは何だろう？と十歳ごろから私は一生懸命考えていた。そしてそれは長く歩くことだ、と考えついた。

私は走るのとはとても遅かった。でも長く歩き続けることは嫌いではなかった。それに私は小さいころから主人公の子供が長い一人旅をするという物語に馴染んでいた。「家なき子」「母をたずねて」「家なき娘（ペリーヌ物語）」・・・また、旅はしなくても「小公女」のセーラのように逆境の中を強く生きていくという物語も好きだったしキュリー夫人のように大学に入るために働いてお金を貯めた後、列車で長い旅をしてパリに向かった、というようなことにも憧れていた。

それからなぜ一人で行くのかということ本来私は自分の行動を他人に合わせることが得意ではない。そういうことを普段間断なくやっているのだが、それは生きるためにやむを得ずやっているにすぎず、本当は一人で過ごし自分の好きなように行動するのが一番好きである。しかし皮肉なことにうちの家族はみなそれぞれ私と二人で過ごすのが好きらしい。私なら彼らそれぞれの行動や好みに合わせて動いてくれるからである。しかしこちらは好きでそれをやっているわけではない。よけいなトラブルが起こってそれによって自分の時間が削られるのを極力避けるためにやっているだけである。

話を戻そう。ブータンに初めて一人旅をして以来、海外一人旅にすっかり病みつきになった私はほどなく「サンティアゴだって行けるじゃん！」と考えるようになった。そして大車輪で情報収集を始め、夫や他の家族の説得に励んだ。そしてとうとうそれを2016年の五月に決行できる運びとなった。

2012年以来私は毎年海外に出かけるようになり、ブータンに三回行き、サンティアゴ行きの下見も兼ねてオーストリア、ドイツ、フランスを列車で繋ぐ旅もやった。ちょっとだけ韓国にも行った。しかしその四年間は波風だらけの日々でもあった。老親たちは要介護や要支援になり、介護サービスを受けるようになったり数えきれないくらいたびたび救急車のお世話にもなり入退院も繰り返した。他の家族も気胸になったりみんなでノロにやられたりインフルエンザに見舞われたりした。それでも私は押しつぶされまいと頑張った。家事と介護と出入りする福祉関係の方々の対応と種々の手配、手続き……。全体の三分の一ぐらいを義姉が担当してくれているので何とか続いている。ポスティングのアルバイトも十年続いている。旅行に行きたいうちは辞めるわけにはいかないと思っている。

初めころは沢山仕事を請け負い月に十万円以上稼いだこともあったが今できる量は月に二万円にもならないくらいであるが。ともかくこの状況を乗り切らない限りその後の自分の人生はないと思っはいたし、今もそう思っている。

それにしても私が一時的にでも家族のしがらみから解き放たれることができるのは海外一人旅の時だけであ

る。私だって皆と同じ人間であり決して不死身ではないのに皆私に世話をしてもらうことを大前提に生きている。この状況はいつまで続くのだろうか？私はもし自分が将来身体が動かなくなる時が来たとしても世話をしてくれるのは誰でなくちゃ嫌だなどとは決して言うまい。安い施設にでも入れれば御の字である。通いの介護サービスを受けてもよい。夫も子供も細々と世話をしてくれなくても市民として最低限のことをしてくれればよいからむしろ私がいなくても自分自身の生活をしっかりと建てて生きてほしいものである。だから子供たちよ、早く独立してほしい。

2016年4月29日（金）昭和の日

そして夜には私がサンティアゴ・デ・コンポステーラへの旅に出発するという日。

息子K男（26歳）は九時に起き、外出。昼、夜の食事は不要という。ラッキー私は洗濯、調理など家事に邁進。食料品の買い物は娘のS子（22歳）に行ってもらおう。

昼、S子はイオンで皿うどんを食べてくる。私と夫は残り物と買ったおにぎりで。

13:30~14:00、肺炎がきっかけで二週間前から入院している義母のお見舞い。S子と行ってくる。病院は歩いて10分そここの場所だが自転車。病状に問題はないようだ。ひょっとしてまた泣かれるかなと思ったが今日は大丈夫だった。数日前から義母は精神状態がやや不安定であった。私が一か月も家を離れるということで。「もう早く出発して早く帰ってきてほしい」などと言ったり「お金は出すから旅行をとりやめてほしい」と言ったり夜に病院に呼び出されたりした。でもこの日は大丈夫だった。

でも病院からの帰り際、S子がふざけてどうしようもない。このように私と出かけるのが嬉しくて仕方がないらしい。腹が立ち、別々に帰ることにする。

その後はゆっくり過ごした。早くから頑張って支度をしたので余裕がありすぎた。そして18:00少し前に出発。大宮駅から京浜東北線。品川駅でザックをコインロッカーに預け「アンナミラーズ」で食事。

【註】アンナミラーズというのは多種のアメリカンパイを提供するのが売りのレストランで、以前は日本で沢山の店舗を展開していたのだが今は只一つ品川駅前の店舗だけが残っているのだそうだ。私は四十年前に自由が丘に住んでいた時近くにそういう店があるのを知って是非行ってみたいものだと思っていたが、一緒に行く相手もいなかったし当時はそういう高そうな店に一人で入る勇気はなかった。そして一度も行ったことがないまま四十年近くが過ぎ、しかしある日ふと「アンナミラーズ」のことを思い出した。そして今もあるのかどうかネットで調べてみると、品川に一店舗だけ残してあとは皆撤退してしまった、とのことであった。

それから私はにわかに「アンナミラーズ」に通い始めた。といっても年に一、二回である。たびたび行くには遠くて高い。だから年に二回でも多い、というわけで最近では羽田から海外に飛び立つ前に「最後の晚餐」としてだけ利用することになっている。

食べたのはチキン・ポットパイのセット。税込み1490円。内容はチキン・ポットパイとサラダ（オイルとビネガーで）とおいしいパンとバター。ドリンクは頼まず水で済ませた。だって高いんだもん！でもこれだけの量でさえ食べるのが大変だった。小食になったなあ。

その後羽田に向かい「ファーストキャビン羽田ターミナル1」に宿泊。これは国内線の到着フロアにあり、カプセルホテルみたいなものだった。（ビジネスクラス、というので一泊5300円）でも浴場があり入浴もした。これからはばらく海外生活だから「名残の湯」というわけだ。気持ち良かった。殆どベッドだけが占める室内は快適だったが眠れなかった。

4月30日（土）

私は枕が変わるとか何か変わったことがあるとすぐ眠れなくなる性格である。この晩は二時間ぐらい眠れたかもしれない、という感じ。5：08、ターミナルバスで国際線ターミナルに到着。

これまで私はいつも時間の節約のために深夜便を利用して来た。今回は初めてちょっと贅沢をして早朝の便にしてみた。一泊分余分に時間と費用をかけたのである。十二時間に及ぶ長いフライトなのでそうしたほうが身体的に楽だろうと考えたのだ。

機械で搭乗券を発行してもらった後エールフランスの列に並ぶ。非常口そばの席だと言われる。そして非常の際にはCAさんのお手伝いをお願いしたいと言われる。何で私に？と思いつつ仕方なくOKするが英語かフランス語を話せるか？と聞かれる。いや、話せるというほどでは・・・相手が何を言っているのかわからなかったりするのだ。そう言うと相手は困惑する。（かつてにそっちがきめておいてそりゃあんまりでしょ？）そしてどこかに問い合わせて席を変えてくれる。

外貨チェンジは6：00から。パンなどを食べながら20分ほど待つ。

やがて搭乗手続きの時間になり荷物検査がある。私の機内持ち込み荷物が大きすぎるとでも思われたのだろうか？荷物を全部開けさせられる。当然怪しいものなどナシ。無罪放免。でもね、「失礼しました」ぐらい言ったらどうかと思う。こっちは時間がないのに足止めを食らったんだから。外国ならともかくここはまだ日本でしょ？お客様には礼儀正しく親切におもてなしをするのではないの？

そしてさらにそのあと搭乗手続きで並んでいたらアナウンスで呼び出されてぎょっとする。先刻から押し寄せる夫からのメールにも対応しなくちゃならなくてアタフタしていたから。家で何かあって呼び戻されるのかと思ったじゃないか！結果は「申し訳ありません、間違いでした。」ですと？いい加減にしてよ！・・・そしてともかくもようやく無事に機上の人になりました。

フランス人の、あるCAさんに見覚えがある。二年前に乗ったときにも勤務していたのね。

各席のディスプレイに写し出されるセキュリティの案内、五人の美女によるおしゃれな映像が楽しい。

サービスされたコーヒーをペットボトルに移す。一度に飲んだらトイレに行きたくなるからね。

三時間ぐらいたったころトイレに行ってきた。私の席は窓際で、そっとブラインドを開けてみると氷河だかツンドラだかの平原が見える。すごいなあ。

あと七時間を切ったところでチョコランチがけのアイスバーが出た。おいしかった。

一瞬一瞬が楽しい。みんなはディズニーランドやUSJのようなものに夢中になるけど私にとってはこういうのが楽しい。十二時間のフライトのあいだ、飛行状況の案内のディスプレイを眺めていて飽きない。

あと五時間三十分。クラッカーとリンゴジュースが出る。

そして昼食。

その後やっとまたトイレに行く。通路側の人たちに遠慮してしまうのだ。あと四時間。

あと二時間ちょっと。ストックホルムの近く。海上に小さな島々が散らばっている。

あと一時間五十分。雲がかかっている見えにくいドイツあたりの森の上なんだろうな。いや、まだだ。まだスウェーデンだ。

あと一時間。ドイツの上を飛んでいるはず。(雲で見えない。)

出入国カード、いつ書くのかと身構えていたが結局書くことがないままシャルルドゴール空港に到着。パスポートチェックも長い列で並ぶことは並ぶがチェックそのものは超簡単。でもいろいろ場所がわからなかったりしてもたもた、もたもた・・・

そして14:30過ぎ(現地時間。日本マイナス七時間)ようやくTGV空港駅の乗り場に到着。出発時刻や乗り場などの確認をする。

夫にメールをしようと思うが送れず。さっきは送れたのになぜだろう？

空港の売店でリンゴジュースを買った。250mlで2.5€。高いけどおいしかった。

TGVのアナウンス、早口でわからん。英語もフランス語のように聞こえてしまう。

シャルルドゴール空港16:21→ポワチエ18:42

今晚はポワチエ泊まり。あまり先まで行くとホテルに着くのが遅くなってしんどいから。

ポワチエに降りたら雨模様。それなりに大きいけど、なんだか地味で何もなくて明るさを感じない町だ。ただヨーロッパは日本と違って大きな駅の周辺が賑やかとは限らないので、たまたまその時の私がポワチエの魅力的な部分に接する機会を得なかつただけかもしれないのだが。でも駅からそう遠くないはずのホテルがなかなか見つからなかった。地図を読み間違えて反対側に歩いてしまっていたのだ。

19:42、やっとホテルを探し当てる。出発の直前に旅行会社から連絡があり、私が到着するころにはホテルの受付にはもう人がいないはずなので（週末だから。日本では考えられないシステムである。）ホテルに入る方法、部屋番号を知る方法、入室する方法の指示を受けていた。そしてようやく部屋に入ることができてホッとする。

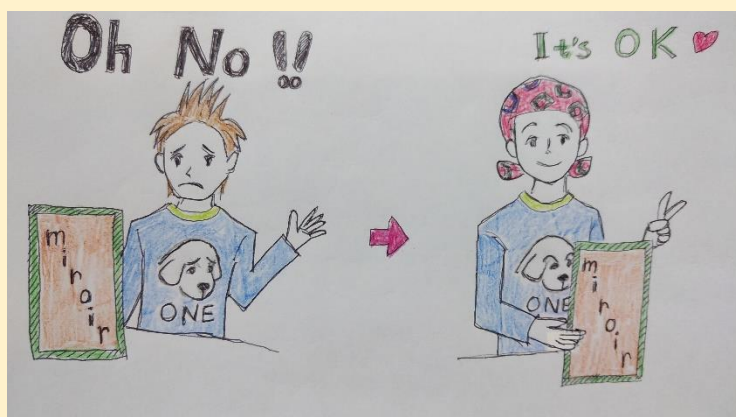
ところで外は午後八時近くでもとても明るい。私には不思議ではしょうがないのだがフランスやスペインではこの時期は午後十時ごろにならないと夜らしい暗さにはならないのだ。

今晚の夕食は機内食の残りのフランスパン、カマンベールチーズ、クラッカー。それと持参のおつまみ用わかめ、昆布、煮干し、プルーン。（栄養補助のためである。）あと粉末のミルクティにお湯を入れて二杯飲んだ。上等である。シャワーもあびたし。

5月1日（日）

リポスミン（睡眠導入剤）をのんで午後11時から朝の3時50分まで眠った。もう眠くないので起きてベッドに座ってガイドブックやいろいろな資料などを読む。昨夜寝る前に夫とちょっとメールのやりとりをした。

髪型がやっぱりチョー変である。二日前美容院にいったうんと短くしてほしいと言ったのだ。シャワーさえ不自由な旅になるから、と。そうしたら何ともいえない形にされた。こうしないとそのうち真ん中で髪が分かれてしまって白髪が目立つようになるから、と。いや、たとえそうだとしても普通のショートヘアの方がよかった。ただうんとみじかくして薄くすいてくれさえすればよかったのに！何だこれは！人前で帽子をとれないじゃないか。仕方がないのでずっとスカーフを被っていることにする。（洗って乾かすとディズニーのウッドペッカーみたいな頭の形になってしまうのである。）



ヘアスタイル最悪！

夫と弟と妹にメール。海外旅行に行く際にはいつも弟や妹に大変世話になっている。私の母が私がこういうことをしていることを知ったら主婦にあるまじきことと大激怒するだろうと思うので伏せておくために口裏合わせや丸め込みなどの協力をお願いしているのである。そして六時過ぎると少しずつ明るくなり始める。

テレビで NHK のフランス版みたいな番組を見た。これも朝のバラエティー番組の一種か。上品だし芸術的だし落ち着いて楽しめる。言葉はあまり聞き取れないけど。ドキュメンタリーとかニュースとかミュージカルみたいなとかダンスとか歌とか子供向きのコーナーとか。日本ではダンスや歌は万人向けではないのでこのようにミックスしてしまったりはしないのだろうか。

バーバパパのアニメをやっていた。



これはむこうのアニメ



これは日本の「アルプスの少女ハイジ」

フランスの子供番組の特色は、アニメだと色々な人種の子供を登場させている。それから日本に比べてキャラクターの言動に男らしさ女らしさの違いが少ない。しかし十代の女の子はかなりセクシーである。それから登場人物は女の子の方が多い。子供や女性の声をことさら可愛らしくなどしていない。・・・など日本とはかなりの違いがある。アニメ以外の番組でも登場する子供はいかにも子供らしい言動というのは見られない。大人の言動から複雑さと毒素を差し引いてあるだけ、という気がする。

子供も大人も同じように歌い、ダンスを踊り、同じように社会生活をする。だからとてもきちんとしている印

象がある。子供だから OK,大人だから OK という場面が出てこない。少なくともテレビの子供番組の中では。

Heidi (ハイディ) すなわち「アルプスの少女ハイジ」のフランス語版アニメをやっていた。元は日本の制作である。

妖怪ウォッチのコマーシャルをやっていた。

アニメのキャラクターはディズニーのような印象。それほどデフォルメされていなくてとてもリアル。きっとこの日は日曜日だったので子供番組が多かったのだろう。

少し厚着をして少し物を食べただけで何となく荷物が減った感じがする。ホテルを出たのは10:00。エレベーターで降りる時1F (日本の2F) と0F (日本の1F) を間違えた。

ポワチエ駅の売店でポテトチップスを買う。1. 6€。TGVは12:34発に乗る予定。待合室で待っていたら日本人のご夫婦がいらしたので二十分ぐらい話をした。私よりは少し若そうであった。私はあまりメジャーな場所には行かないので海外で日本人に出会うことは稀である。それからイスラム系の物乞い少女が来た。二年前にドイツのパッサウの駅でもこういう少女が近づいてきたことがある。もちろん物乞いの要求には応じない。ミュンヘンの駅の周辺でも浮浪者風の人たちを何人か見たし、ヨーロッパの都市にはそういう人たちが多いようだ。なかなか難しい問題なのだろう。

駅の構内の片隅に古いピアノが置いてあり、子供がいじったりしていたので私も弾いてみた。でも楽譜がないとうまく弾けない。やがてTGVが到着。ポワチエを発つ。

13:20、アングレーム (Angleme) という駅を過ぎる。

私はフランスやフランス人にかなりよいイメージがある。まあ、大方の日本人はそうだろうと思う。特に女性たちは憧れる?何となく?・・・そういうミーハーチックな気持ちは私にもないではない。でももっとちゃんと考えてみてもやっぱり私はフランスやフランス人が好きだ。その理由は、まず風景も人の姿も一般に上品できれい。地味だけどさりげなくお洒落である。太った人があまりいない。(フランス人よりもドイツの方が明らかに太っている。アメリカ人は言うに及ばず。)

それからあまり人とつるまないようだ。電車内などでも(通勤とかのときではなく)一人で乗っている女性はかなり多い。うるさくおしゃべりする人も見かけない。でも家族連れはよくいる。子供たちはしゃべっているがそううるさくはない。でもフランス人は喋ると理屈っぽいらしい。

フランスには黒人がたくさんいるが彼らもとてもカッコいい。アメリカにいる黒人たちとはルーツがちがうのだろうか?

ところでTGVは優れた高速列車だが少し困ることがある。車内が特に狭いわけではないのだが大勢の大柄な乗客が皆大荷物で乗って来るので私が自分の席までたどり着くのが至難の業だということだ。しかも車両や座席の番号がどこに書いてあるのなかなか探せない。街の看板じゃないんだから目立つように書いてくれないと

もないということはないだろうに。駅構内の案内表示なんかも日本に比べるとわかりにくいし、なんとかしてほしいものです。決して文字が読めないせいではないと思います。

それからこれは別に迷惑なことではないのだが、みんな駅に到着する十五分も前から降りる準備をする。停車時間はけっこう長いのだが。

今日はフランス最南部の町、バイヨンヌまで行く。途中ボルドーで乗り換え。ボルドー着14:32__ボルドー発15:51。ボルドー駅の中の店でサンドイッチ4.7€を買った。そしてこの駅の構内にもピアノが置いてあり、弾いた。そういうことをすると日本だったら見物人が集まって来そうだが、特にそういうことはなかった。



ボルドー駅のストリートピアノ

ダクス (Dax バイヨンヌの一つ手前。) のあたりもバイヨンヌもサン・ジャン・ピエ・ド・ポーもあたりの民家の屋根は赤。赤い瓦屋根である。そしてドアや窓枠も赤。壁は白。(村や町ごとにこういう風に建物の外観を統一できるってすごいことだと思う。)

バイヨンヌに到着。17:34。翌日わりと朝早くにサン・ジャン・ピエ・ド・ポー行きの電車に乗るので乗り場を確認してからホテルに行こうと思っていたのだがわからなかったので、とりあえずホテルに行ってこの思い荷物を置いて来ようと思った。

それにしてもバイヨンヌってこんなに暑かったかな？二年前に下見に来てみた時にはそんなことはなかったと思うが。パリやポワチエは寒かった。ボルドーも涼しかった。しかしバイヨンヌは暑い。こんなに違うのか？パリやポワチエの外気温は10℃ぐらいだったのだろうか。ボルドーで15℃ぐらい？しかしここは25℃はありそう。ポワチエとバイヨンヌで15℃も違うのか？

ホテルには少し迷って到着。こんなにすぐそばにあるのにまさか迷うとは思わなかった。ほんとに表示や看板が目立たなすぎる。上品でわかりやすい表示ってないのだろうか？ホテルに荷物を置いた後もう一度バイヨンヌの駅に行き、サン・ジャン・P・P行きはEのホームから出るらしいことがわかった。

そのあと周囲を散策する。二年前に泊まったホテルや買い物をした通りを訪ねてみる。ホテルはわかったが店は日曜日で閉まっていたのでよくわからなかった。それからバイヨンヌって、前にはそう思わなかったが北の方とはかなり感じが違う。たまたまなのかもしれないが何となくガラの悪そうな雰囲気の人がそこここにいる。私の勝手な偏見かもしれないが。

5月2日（月）

なぜかあまり眠れなかった。トータルで二時間ぐらいかなあ。

荷物、もっと減らしたいのに今日は暖かくて薄着をしているせいでままたまならず。不安があるが空のペットボトル500mlと250mlを捨てる。

六時過ぎ、ホテルの朝食。ハムやチーズはなかったがお洒落な雰囲気だ。クロワッサン一個と他の二種のパンを少しずつ、クリームの入ったチーズケーキみたいなのと乾燥イチジクと、あと何だかわからないがドライフルーツ（種があった。）を一個食べた。あとオレンジジュースとカフェオレ。



パンとドライフルーツ 手前のボウルはカフェオレ



オシャレなんだけど塩気のないものが全くないのが難点・・・

そういえば前日ポワチエのホテルの朝食のことである。フランスではクロワッサンとカフェオレ、とよく言われるが、パンはクロワッサン以外にもいろいろある。しかしハムやチーズ、ましてやサラダその他の料理など、塩味のあるものは必須ではないらしい。野菜のあるなしよりも、こちらの朝食メニューが日本人、他のアジア人、それから多分イギリス人にとってもしばしば物足りなく思われるであろうその理由は「塩味の不足」によるものではないかと私は思う。

一方甘みは必須であるようだ。逆に日本人の朝食ではある程度の塩味は必須だが甘みはちょっとあれば嬉しい、という感じである。ポワチエのホテルは朝食付きであったがその内容は、あらかじめトレイに置かれていた菓子パン二個と小さいパックのジャムと、スティックのインスタントコーヒーとティーバッグであった。

ついでに言えば二年前、ドイツのパスサウのホテルに泊まった時には朝食がついていた。ダイニングルームに数種類のパンとコーヒー紅茶とハムやチーズが少々用意されていた。そのあとでミュンヘンからパリまで寝台車に乗ったら朝食のサービスがあった。ランチボックスのようなものの中にパンが二種とチーズが入っていて、沸かしたコーヒーが別にサービスされた。私は飲みきれなかったそのコーヒーを前日買って半分飲んだ牛乳のボトルの中に移して持ち歩いた。

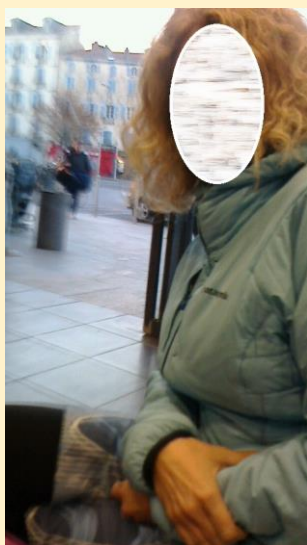
そのあとに泊まったバイヨンヌのホテルでは朝食付き、ではなかったが、別料金でかなりすてきな朝食をいただいた。数種のパンと数種のハムやチーズ、野菜などとコーヒーや紅茶。大変満足したがこの料金は11€もした。

つまりフランスあたりの一般的な朝食は基本がパンとコーヒー、(クロワッサンと決まっているわけではない)

それに余裕があればジャム、ドライフルーツ、ハム、チーズなどが付くということだ。しかしナイフや火を使って調理したものを提供することはまずないようである。

朝食後七時までテレビで子供番組を見る。言葉は半分ぐらいしかわからないが面白い。そして7：45の電車でバイヨンヌ駅を出発。サン・ジャン・P・Pの駅には8：43到着。

バイヨンヌの駅で、デンマークから来たベッティーナという女性と知り合いしばらく一緒に行く。何歳なのかはよくわからない。多分三十代か四十代だろう。



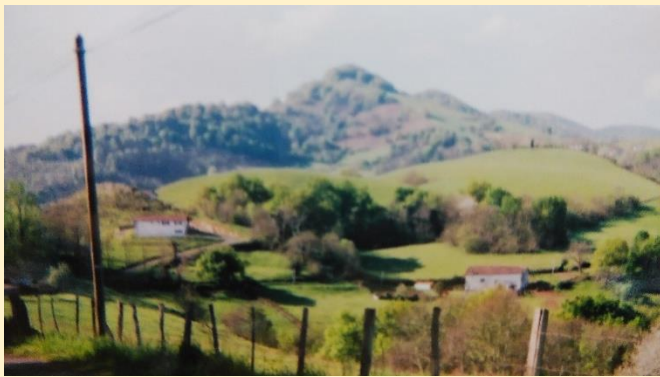
ベッティーナ



サン・ジャンの駅前の案内板の前で 手前ベッティーナ

電車内で気分が悪くなる。車酔いだろうか？サン・ジャン・P・Pに着いて下車して少ししたら治った。駅にトイレがあり、利用した。このようなことをわざわざ書くのは二年前に下見に来たときにはそのトイレはなかったからである。その時はなぜか電車も走っていないくて多分代行だったのだろう、バスが走っていた。しかし駅に駅員はいた。それなのに「トイレはない」と言われ、仕方なく十分以上歩いて町の中心部の公衆トイレに行って用を足したのである。

二年前に下見をしておいたサン・ジャン・P・Pの巡礼事務所でいろいろな手続きをして、危険に遭わないための注意をいろいろ受けたあと歩き始めるが、そのころからだんだん自分の荷物の重さがいかに只ならぬものであったかを知ることとなった。周囲は皆欧米人で足が速い。私はどんどん置いていかれほとんどビリになる。音に聞く「ハードなピレネー越え」とはこれか？日本ではザラにある坂道だと思うがやはり荷物のせいだ。時速5kmなんて出せやしない。



出発から間もなくの風景



ここはまだフランス

12:00 ごろようやく 8km 地点のオリソンと呼ばれるアルベルゲに到着。宿泊や飲食ができ、ただ休憩するだけの場所もある。先に着いていたベッティーナと再会する。この先のロンセスバージェス（フランス語ではロンセポーという）まで行こうと思っていたが今から 17.5km 先までというのは無理だ。やめた方がいいと考えここで泊まることにする。ベッティーナもそうするという。

アルベルゲというのは巡礼者用の宿泊施設で公営と私営がある。食事はつくところとつかないところがある。料金は概ね安いか寄付のみ、であるが窮屈で居住性が悪いところほど安く、快適なところほど高いとみてよい。このオリソンで宿泊したいと申し込むと、宿泊だけなら 15€, 夕食（ディナーという）が付くとプラス 20€ と言われる。ちょっと高すぎないか？ 山の上の不便なところだからかな。

宿泊だけでいいと言ったらそれなら「カヨラ」というコテージへ行くように、と言われた。ベッティーナも一緒。カヨラへの道はせつかくさっき登ってきたばかりの道を 10 分以上戻る。あーあ……。でもコテージはわりときれいだった。でも日蔭は寒かった。女性ばかり十人ほどが同宿。皆で日向ぼっこをする。若い人もそんなに若くない人もいる。でも私が一番年上だろうな。こういう雰囲気ってヨーロッパの野外学校に一月留学したみたいな感じかな、と思った。

シャワーはあるが冷水しか出ないようなのでやめておいた。食事はそれぞれ手持ちのものを食べる。暖房は、暖炉があったので一人の若い女性が薪を探してきて点火してくれてそれで温まることができた。でも夜通し燃や

し続けたわけではないので夜はかなり寒かった。

リビングにいろいろな本が置いてあった。巡礼関係のものが多いようだがハンゲルのものやロシア語のものもあった。家にメールをする。



カヨラというコテージで。二階が寝室、階下にリビング、キッチン、バスルームがある。

5月3日（火）

6：30、ベッティーナと一緒に出発。まだ暗い。七時ごろ明るくなる。彼女とは初めは一緒に歩いていたがやがて置いて行かれる。どこかで待っていてくれるのかなあと考えたがとうとう最後まで会わなかった。待たずにどんどん行ってくれたのならその方が気が楽だけど。私がブルゲーテまで行きたいと言っていたのでブルゲーテで待っているのだろうか、と考えながらも私はロンセスバージェスまでたどりつくのがやっとだった。それからだんだんわかってきたが、これは普通のことだった。巡礼路で知り合った人と暫く一緒に歩いたとしても、この先までずっと一緒に行こうとはっきり約束したのでもない限り、相手の足が遅いなどと思ったら速い人はどんどん先に行ってしまっているのである。悪いけどお先に行くね？と丁寧にことわる人も中にはいるが、それはやらなくても別にかまわないことのようなのである。

1100m～1460mの山越え。山は日本の奥多摩山中にある車道ぐらいの道で景色もとてもいいのだが霧と寒風のせいで装備が悪いと遭難するな、と思った。五月でも雪が降る時はあるかもしれない。私は装備は問題ないと思った。手袋は二枚重ねで装着しているし、オーバーズボンも履いている。でも心臓が苦しくてたまらない。だからといって長く休んでいると体が冷えて危ない感じであった。それに加えて疲労のため物が食べられなくなっていた。

もうガタガタになってようやくロンセスバージェスにたどり着いたのが14：45である。ここのアルベルゲは教会の経営で収容人数120名という大きなものだが宿泊施設部分はお城のように大きな建物（修道院らしい）のほんの一部のようだ。三階か四階にわたるある程度の広さのフロアに二台ずつ仕切りで区切られたベッドがずらっと並んでいた。その後の体験によるとアルベルゲのベッドは二段のことが多く、シングルベッドが並んでい

るところもたまにあったがこのように仕切りがついてブースのようになっているのを見たのはここだけだった。

私は到着後、建物の前で動けなくなり暫くそこに座り込んでいた。そのあと四時の受付時間になりベッドを確保するとひたすら寝る。起きるのはトイレに行く時と水を飲む時とビスケットを舐める時だけ。夕食は断った。それで12€。朝食はつかないそうだ。動悸が治まるまでに三時間ぐらいかかった。眠れたのかどうかよくわからないままに朝を迎える。

5月4日（水）

朝六時、スタッフの一人らしい男性がギターを奏で歌いながら登場。“Wake up Susy・・・”と歌っている。しゃれたモーニングコールだ。起きて建物から出て中庭で家に電話をかけ、K男が出たので少し話す。



ギター弾き語りによるモーニングコール。このようなブースになっていることは他ではなかった。





大きな修道院が宿泊施設になっているロンセスバージェス

七時前に出発。本当はもう荷物を背負いたくないのだがパンプローナの町まであと50km、そこまで行かねば郵便局さえない。50kmだと二日間かかるわけだ。このままの状態でも歩き続けたら心臓に異常を来して死んでしまうかもしれないので無くてはすむものを日本に送り返そうと考えていたのだが、仕方なくこの日もそのまま歩き続ける。緑の木立の中の小道が続く、それはとても快適で荷物の重さも何とか我慢できる。

歩き始めて間もなく話に聞いていたBarというものが初めて出現。日本語でバルとかバーとか言ってしまうとちょっと感じが違うのでここでは「バール」と表記することにするが、これは朝はカフェテリア、昼はレストラン兼バーとなる便利なスペインの飲食店である。あちこちにあり、朝7:00~10:00ぐらいに開店し、夜は10:00~12:00ぐらいまでぶっ通しで営業してくれている。日曜日だって休まない。一般の商店は昼から夕方五時とか七時まで休みだったりするのに、だ。



ブルゲーテの町に入ったところにあるバール



皆ここで朝食を摂るので大賑わいです

寒くないベッドで長時間休んだので一応身体は回復しおなかもすいていたので朝食をとりに入る。当然他の人たちも朝食はまだなので行列を作っている。大変混雑していたが何とか席を確保。そして大きなクロワッサン一個とカフェ・コン・レチェ（カフェオレ）を頼む。2€だった。安いなあ。でも食べきれなかった。それに引き換え他の人たちの沢山食べることといたら！日本の倍サイズのデニッシュやキッシュを三つぐらいと果物と飲み物二種、という感じである。テイクアウトのバゲットだって一メートルほどの長さである。私は残ったクロワッサンをしまい込む。店の息子さんらしい7~8歳の少年がお手伝いをしていた。



ブルゲーテの町はこのような家々が続き・・・



ふいにこのような田園地帯に入る



小さいけれども有名なブルゲーテという町に入る。ヘミングウェイにゆかりの深い町なのである。次のエスピ

ナル村からメルキリツ峠ぐらいまでは順調に行く。しかしその先のビスカレッタ、リンチョアインあたりから高低差はさほどではないのだが坂道がきつくなってくる。たびたび休みながら行くので人目に付き、多くの人に心配され励まされる。

山道の途中に「ヤマシタ シンゴ」さんという日本の64歳の男性が2002年にここで亡くなった、と書いてある碑を見る。心臓発作か何かを起こしてしまったのかなあ、気をつけなきゃ。

15:20ごろやっとエーロ峠。移動販売車があって、そこでオレンジジュースを買って飲む。2€。ちなみにスペインではオレンジジュースはどこでも「その場でしぼりたて」。どこのバールにもオレンジ搾り器がおいてあり、とてもおいしいジュースが飲める。そのかわり他のジュースにはあまりお目にかからない。たまに紙パック入りのリンゴジュース、アプリコットジュース、トマトジュースなどがあって買ったこともあるが。

そのあとは穏やかな下り坂だったがとても辛くて何度も休んだのでスビーリという町に到着したのは17:00過ぎであった。今晚泊まるのはもうここしかない。

17:00というのは宿探しをするにはかなり遅い時刻である。どこのアルベルゲやホテルを当たっても皆「コンプリート！」(満員)と言われる。でも何軒目かで「床の上でいいなら」というところがあった。勿論私は即OK。一緒にいた欧米人の人たちは「ゆか〜？え〜え?!」(信じられない)という感じが他をいくら当たってもダメようで、しばらく外を回ってきたのち結局戻って来て私の相客となった。しか屋根と壁さえあれば充分と思っていた私でも「木の床かな?」と思ったわけで、まさかコンクリートの床とは思わなかった。欧米人の人たちは「なんて貴重な体験をする私たち!」と自虐的に苦笑いていた。でも宿泊料金は最安の3€。



何かの倉庫かと思ったが体育館なのだそう

シャワールームはあるにはあったが別で、まるで日本の古い小学校のプールの脇のシャワーのような代物。あんなにかわからないような仕切りの中でほとんど水のようなぬるま湯を浴び、急いで身体を拭いて震えながら倉庫のような宿泊所に戻る。そしてありったけの物を敷き、かぶり、とりあえず人心地がつくまで身体を休め夜八時ごろやっと起き上がって食べる場所を探しに行く。ちゃんと食べられるような感じではないがとにかく何かエネルギーになるようなものをからだに入れないと命にもかかわると思った。

町の中心部のやや大きなバール入り、スープはないかと尋ねみた。「スープだけ?」と聞かれて「とても疲れているのであまり食べられない。スープだけでいい。」と言うと大きな楕円形の丼のような器に入れたスープを用意してくれた。にんにくがきいていて、くだいたゆで卵とフィデウオというスペイン特有の細かいパスタの入ったスープだった。パンチが効いていてとてもおいしかった。力が蘇える気がした。しかし残念ながら全部は飲みき

れなかった。4・5€だった。でもこの時からフィデウオというパスタが大好きになった。スペインではどこの食料品店でもスーパーでも売っていて帰国時に少し土産に買ってきたが日本の食料品で見つけたことはまだない。

5月5日（木）

朝六時過ぎ、夫から電話。状況報告をする。まだ他の人たちは寝ているので外に出て通話をする。

荷物をまとめて倉庫を後にする。（私はそこが倉庫のように見えたのだが後から知ったところでは体育館だということであった。）昨夜と同じバールに行き、ホットチョコレートとアップルパイを頼む。計3・7€。でも甘すぎてあまり食べられずこっそりテイクアウトする。



5月4日の夜と5月5日の朝に利用したバール



ホットチョコレートとアップルパイ

ここからなら約30km先のパンプローナまでバスで行けそうなのでいろんな人にバスの停留所の場所を尋ねてみるがなかなか言葉が通じない。「カミーノ（巡礼者）は徒歩」と思い込んでいるので誰に聞いても歩いて行く方の道を教えてくれるし、そもそも英語のわからない人が多いのだ。「バス・ストップ」という単語ぐらいはわかるだろうと安易に考えていたがダメだとわかったので仕方なく会話帳を取り出し「ドンデ・エスタ・デル・パラダ・デ・アウトブス？」と正しいスペイン語で尋ねるとすぐに通じた。バス停は夕べ泊まったところのすぐ近くだった。



バスの停留所

パールのセニョーラ（マダム）は「バスは九時」と言ったようだった。待っていると登校する高校生たちが集まってきた。そのときはまだ八時ごろだった。高校生たちの乗るのはスクールバスで、私の乗る路線バスとは別であるが一応一人の女子高生にも聞いてみた。路線バスの時刻は九時で間違いないようだった。

そのうち私の他にもバスに乗るカミーノたちが集まってきた。中年の女性が六名、若い女性が一名、男性が一名であった。それぞれどこから来たか、とかどういう事情でもう帰らなければならない、とか話が弾む。サン・ジャン・ピエ・ド・ポーに住んでいるという女性がいて、あとドイツから来た母娘連れがいて、あと他にドイツ人女性が二人、南アフリカからの女性が一人いた。（素性を尋ねなかった人もいる。）私が「昨夜は到着が遅かったためにどこも満員で、倉庫みたいなところの床に寝ることになった。」と言うと、「まあ〜！」と驚かれ、「皆さん、こちらのマダムはタベ床に寝させられたんですってよ！」と話題にされた。パンプローナまでのバスは2€だった。

パンプローナの町に着く。ここはなかなかの都市である。パンプローナのバスターミナルは新宿バスタみたいに大きい。でもバスはそれほどいない。

南アフリカからきた女性（40代か50代？）とバスを降りてから少しの間一緒にいた。そして誘われていっしょに写真を撮ってもらったり（通りすがりの人に）した。彼女がこれからどういう予定なのかよくわからなかったが私はとにかく早く郵便局に行きたかった。



南アフリカ共和国から来た女性と

私が通りすがりの人に「ドンデ・エスタ・デル・コレオ？」（郵便局はどこですか？）と尋ねたりしていると、彼女はふいに「私は教会に行きたいから」と言って別れていった。そのあとある若い女性に道を尋ねたらとても親切に教えてくれ、案内までしてくれた。彼女は英語が堪能だった。

郵便局は日本のようにあちこちに小さいのがあるわけではないらしい。大きな町に大きな郵便局がデン！と一つだけある。しかし建物は大きいのだが中に人はあまりいない。私のように国元に何かを送りたい外国人らしい人が何人かいた。そしてその局員の数は日本の小さな郵便局の職員の数と同じぐらいしかいないように見えた。

郵便局でもなかなか話が通じないで手間取った。英語がわかる人が二、三人しかいない感じである。が、何とか送れた。郵送費は40・39€で箱代が3・17€だった。

しかしここで私は大失態をやらかした。後でホテルに入ってから気が付いたのだがなんとクレデンシャル（巡礼証明書）をシュラフ、スニーカー、セカンドバッグの荷物と一緒に箱に入れて日本に送ってしまったのである！セカンドバッグのポケットに入れたままだったのである。このクレデンシャルは日本では東京カテドラルというところでのみ発行されていてとても美しいデザインでレアなので持っているといい気分になれる。尤もクレデンシャルを紛失してもスペインではどこの教会や巡礼事務所でも発行してもらえるので日本国のパスポートを送ってしまった！というような大ごとではないのだがとても残念で自己嫌悪なことであった。

それはまあいいとして「シュラフ、スニーカー、バッグ」はないとかなり不便ではあるが命に係わるほどではない。一応屋根と壁のあるところで寝るのだし、登山靴を履きたくないときにはホテルでもらったペタンコスリッパですませ、小物を入れるのはビニール袋でも可能だ。しかしあとのものは何一つ捨てるわけにはいかなかった。もしかしたら使わずに終わるかもしれないとしてもそれは終わってみなければわからない、使うかもしれないものばかりだった。でもこれだけでも荷物の重量は15kgぐらいから12・5kgほどに減り、かなり気分が楽になった。

郵便局の近くに、広場に面した都会的でおしゃれな感じのバールがあり、サンドイッチの種類が豊富であった。そこで昼食をとることにした。ホテルはまだ決まっていなかったが、腹が減っては戦はできぬ、である。そして腹ごしらえが済んだところで宿探し。だがパンプローナの町は大きすぎてアルベルゲのような安宿がどこにあるのか探すのがとても大変である。とにかく方向がわからなくならないように歩きながら、泊まれそうなところを片っ端から探してみることにする。この際高いホテルだっにかまわない。高いといたって日本の高級ホテルよりは安いはずだ。

そしてアルベルゲよりは高いがホテルよりは安い「ペンション」らしきところの一、二か所に行き当たったが入り口に並んでいるボタンの押し方がわからず、どうやって中にはいるのかわからない。しかしそうしているうちにふいにホテルらしきものに行き当たり入ってみた。外見的には目立たないがどうやら高級なホテルらしく、カミーノだとはわかるであろうが異形の貧弱な風貌の私は大層怪訝な目で見られた。「あなたが泊るの？」「ここがどこか知ってる？」みたいな。

「はい（知ってますよ）、高いんですか？」

「79€ですが。」

「ではそれをお願いします。」

そういうわけで私はその晩高級な四つ星ホテルに泊まることになった。ただしホテルのレストランなどを使うわけではなく、食事は外食か持ち込みの予定であった。部屋で私は荷物の整理や洗濯をする。洗濯したものは手絞

りなので水がダラダラなうちはバスルームにかけておき、水気がとれてきたら部屋の中に広げる。バスタオルを活用してタオルドライをするとかなり効率的である。

クレデンシャル紛失に気付いたのはこのころである。私はすぐに巡礼事務所を探しにでかけ、クレデンシャルを再発行してもらった。というより「お金を出しさえすればすぐに新しい用紙をくれる」みたいな感じで非常に簡単であった。日本でクレデンシャルをゲットするまでのあの手間と時間と費用は何だったんだ?!という感じである。スペイン国内で発行されるものは皆同じなのか、それは多くの人が持っているデザインのものであった。日本のものよりはかなりシンプルだったが。(ところでその巡礼事務所が公営のアルベルゲだったようだ。)

そのあとさっき昼を食べた時のパールに行き、夕食用のサンドイッチを購入した。商品はもうかなり少なくなっていた。なんだかもうすぐ閉店みたいな感じだった。

「テイクアウトしたい」ということをわかってもらうのに手間取った。二年前にフランスでも「テイクアウト」という言葉が通じない、と思ったことがあった。そういう時はなんというのだろうか?それから食料品店を探し、バナナとスモモと牛乳500mlを買った。甘いものは避けたほうがいいと思った。甘すぎるので胃に負担を感じるのである。でもしょっぱすぎるものも多い感じだった。ホテルに持ち帰って食べたツナの入ったサンドイッチはとてもしょっぱかった。



パールでのランチ



夕食はホテルに持ち込み

落ち着いたところで考えた。「頑張って歩こう」から「楽しく歩こう」に方針を転換しよう。「楽しく」とは「時間や金をかけて労力を省いて」という意味ではなく、心臓や胃が苦しくなったりせずに食べ物がおいしく食べられて、よく眠れて、ひたすら歩くにも勝る得難い体験をいろいろして、もちろん危険な目に遭わないように無事に終了する旅のことである。でもこれって、ただひたすら頑張って達成感を得るよりずっと頭を使うので充実感がさらに得られるのではないだろうか?

考えてみれば日本のような精巧な時刻表の流布していない国に一人でやってきて、しばしば予定や計画の通りに行かずその場その場で起こることに対応して周囲の人にいろいろ聞きまくりながら(ろくに言葉が通じないのに)全力で奮闘して切り抜けてきている私って、なかなか大したものじゃないか。この日の晩高級ホテルに泊まったのは「ペンシオン」への入り方がわからなかった、というなりゆきのせいでもあるけれど、この三日間に疲労困憊した身体を癒し、ぐちゃぐちゃになってしまった荷物を整え、この新たな状況に応じた新しい計画を練り直すためにどうしても必要なことだったのだ。だからこれでいいのだ。明日からはもし寒くなければシュラフなしでアルベルゲにも泊まろう。ペンシオンを探すのなら田舎で探そう。町なかのペンシオンはなぜか入り口が独

特でわかりにくいから。

その晩、しょっぱすぎるツナサンドにフィンガービスケットを挟んでおいて塩味を和らげる方法を発見した。それから甘すぎるものを食べる時でお湯がない時でもティーバッグがあればペットボトルを使って水出し紅茶が出来ることにも気づく。

ところでスペインのテレビ、三局ぐらいしかやっていない。ブータンのほうがもっとたくさん入ったな。隣がインドだから。

【中の部に 続く 】